

## **不信仰な私をお助けください**

マルコの福音書9章14-29節

### **はじめに**

今日の聖書箇所には、イエス様が汚れた霊に取りつかれた子どもを癒やされる出来事が書かれています。この子どもの父親は、長い間この子のことで苦しんできたのです。

私たちの人生にも、様々な苦しみがしばしば訪れます。病気や家族のこと、将来の不安や仕事のこと、あらゆる人間関係のことなど。

イエス様は、当時の人々のあらゆる苦しみを癒やされました。イエス様は天に昇られた今も、聖霊を通して私たちと共にいて、私たちのあらゆる苦しみを癒やされます。そのことを信じるために、今日の出来事を見ていきましょう。

### **1. 父親と汚れた霊に取りつかれた息子の苦悩**

ある父親が自分の息子の癒しを求めてイエス様のもとにやって来ました。この息子は、幼い時から汚れた霊に取りつかれていて、その霊によって、耳が聞こえず、口もきけなくなっていました。耳が聞こえず、口もきけない息子を抱えていたこの父親は、様々な面で苦労したと思います。

しかしこの息子に取りついていた汚れた霊は、耳を聞こえなくし、口もきけなくするだけでなく、突然この子をところかまわず倒したりしたのです。その度にこの子は、泡を吹き、歯ぎしりして、からだをこわばらせたのです。さらにこの汚れた霊は、何度もこの子を殺そうとして火の中や水の中に、この子を投げ込んだりしたのです。この子には、絶えず怪我や命の危険がありました。いつ起こるか分からない発作的な行動に怯えながら、この親子は過ごしていたと思います。

耳が聞こえず、口がきけないだけでも多くの苦労があるのに、突然の発作的な行動による怪我や命の危険に絶えず怯えながら、この親子は長い間過ごしていたのです。

そこでこの父親は、思い切ってイエス様のもとに息子を連れて行くことにしたのです。イエス様なら息子から汚れた霊を追い出し、癒やして下さるかもしれないと思ったからでしょう。

しかしイエス様のもとに息子を連れて行くと、イエス様はおらず弟子たちだけがいたのです。イエス様はこの時、ペテロ、ヨハネ、ヤコブを連れて、高い山に登っていたのです。仕方なく父親は、弟子たちに汚れた霊を追い出してくれるようにと願ったのです。しかし、残念なことに、弟子たちには汚れた霊を追い出すことはできなかったのです。

この時の父親の絶望感はどれほどだったでしょう。「やはりダメか、うちの子は特別だか

ら癒されないのか」と思ったことでしょう。弟子たちが追い出せなかったのだから、イエス様にも追い出せないのかもしれないと思ったことでしょう。

## 2. 霊を追い出せない弟子たち

しかし、なぜ弟子たちには汚れた霊を追い出せなかったのでしょうか。弟子たちは以前、イエス様から汚れた霊を制する権威を授けられて、二人ずつ宣教旅行に遣わされたことがありました。その時は、多くの悪霊を追い出したり、多くの病人を癒やしたりすることができたのです。

そのため弟子たちは、汚れた霊を追い出すのは初めてのことでなかったのです。やったことがなかったから追い出せなかったわけではないのです。以前はできていたのに、今回はできなかったのです。

弟子たちも、なぜ自分たちが以前できていたのに今回できなかったのかが分からなかったのです。そこで後になって弟子たちは、イエス様に尋ねるのです。「**私たちが霊を追い出せなかったのは、なぜですか**」。するとイエス様は、こう言われます。「**この種のものは、祈りによらなければ、何によっても追い出すことができません**」。イエス様は、汚れた霊を追い出すためには、「祈り」が必要だと言われました。弟子たちはこの時、祈らなかったのでしょうか。とにかくイエス様は、弟子たちには「祈り」が欠けていたと言われるのです。

私たちの人生には、様々な苦しみがしばしば訪れます。病気や家族のこと、将来の不安や仕事のこと、あらゆる人間関係のことなど。自分の身にそのような苦しみを訪れることもありますが、身近な人にそのような苦しみを訪れることがあります。そのような時に私たちは相談を受け、助けを求められることもあります。その時に私たちにできること、それはまず何よりも「祈り」ではないでしょうか。誰か苦しみを抱えた人が目の前にいる時、私たちがすべきことは「祈り」であると、イエス様はこの出来事を通して私たちに教えているのではないのでしょうか。

## 3. 信仰を求めるイエス

では、苦しみを抱えた当事者にイエス様が求めていることは何でしょうか。父親は、山から降りて来たイエス様を見ると、父親は息子をイエス様のもとに連れて行きます。そして「**おできになるなら、私たちがあわれんでお助けください**」と言うのです。

この父親は、「息子をあわれんでお助けください」というのではなく、「私たちがあわれんでお助けください」と言っています。この言葉から、この父親も助けが必要であることが分かります。長い間、耳が聞こえず、口もきけない息子を抱え、突然の発作的な行動によって怪我や命の危険に絶えず怯えながら生活しなければならない、その生活に父親自身も疲れ切っていたのではないのでしょうか。

しかしイエス様は、この父親の「おできになるなら」という言葉を問題にして、こう言われます。「**できるなら、と言うのですか。信じる者には、どんなことでもできるのです**」。イエス様は、

この父親に「信仰」を求めたのです。イエス様を信じることを、イエス様には「どんなことでもできる」と信じることを求めたのです。

すると父親はすぐに、こう答えます。「**信じます。不信仰な私をお助けください**」。父親は、イエス様を「信じます」、イエス様には「どんなことでもできる」と「信じます」と告白しています。しかし同時に、「不信仰な私」と言うように、自分は「不信仰」だと認めているのです。「おできになるなら」と半信半疑でイエス様に助けを求めてしまった自分だけ、**「信じる者には、どんなことでもできる」と聞いて、イエス様を信じてみたいと思ったのです**。イエス様を信じることで、本当に自分と息子が助かるなら信じてみたい、信じてみようと思ったのです。

するとどうでしょう。イエス様は汚れた霊に向かって、「この子から出て行け。二度とこの子に入るな」と言って、この息子から汚れた霊を追い出されたのです。

イエス様は私たちに、「信仰」を求めておられます。イエス様を信じることを、イエス様なら「どんなことでもできる」と信じることを求めておられるのです。イエス様が山から降りて来た時、大勢の群衆が弟子たちを囲んでいて、弟子たちと律法学者たちが議論をしていたのです。議論のテーマは、弟子たちがなぜ汚れた霊を追い出せなかったのかということです。弟子たちは、大勢の群衆が見ている前で、なぜ汚れた霊を追い出せなかったのかと責め立てられたのでしょ。汚れた霊を追い出せないお前たちの力は偽物だ、お前たちの力が偽物なら、イエスの力も偽物に違いないと言われていたのかもしれない。

イエス様はこの状況を見て、こう言われます。「**ああ、不信仰な時代だ。いつまで、わたしはあなたがたと一緒にいなければならないのか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか**」。イエス様は、この場にいた大勢の群衆、律法学者たち、弟子たちの中に、「信仰」がないのを見て、嘆かれたのです。このことから、イエス様は私たちに「信仰」を求めておられることが分かります。特に、「いつまで。わたしはあなたがたと一緒にいなければならないのか」と言われているように、イエス様が天に昇られてからはより一層「信仰」が求められていることが分かります。

## **おわりに**

イエス様が今日の聖書箇所、特に「信仰」を求めておられるは、父親と弟子たちに対してです。不思議なことですが、イエス様はここで、汚れた霊に取りつかれた息子本人には「信仰」を求めていません。この息子を支える周囲の人に、この息子を助けようとする人々に「信仰」を求められたのです。そして、父親の「信仰」によって息子を癒やされたのです。

福音書を見ると、イエス様は病気や汚れた霊に取りつかれた人を支える周囲の人の「信仰」を見て、癒やされることがあります。屋根からつり降ろされた中風の人が癒された時も、イエス様はこの人を担いできた四人の人の信仰も見られました。会堂司のヤイロの娘を生き返らせた時も、ヤイロに「恐れなくて、ただ信じていなさい」と言われ、父親の信仰を求められました。またカナン人の女の娘が悪霊に取りつかれていた時も、カナン人の女に向かっ

て「あなたの信仰は立派です。あなたが願うとおりになるように」と言われて、娘を癒やされました。また百人隊長のしもべの病気を癒やされた時も、百人隊長に向かって「わたしはイスラエルのうちでも、これほどの信仰を見たことはありません」と言われました。

イエス様は、問題を抱えた人を支える周囲の人に、「信仰」をもとめられるのです。その人を助けたいと思う人に、イエス様に対する「信仰」、イエス様なら「どんなことでもできる」という「信仰」を求められるのです。

私たちの人生には、様々な苦しみがしばしば訪れます。病気や家族のこと、将来の不安や仕事のこと、あらゆる人間関係のことなど。自分の身にそのような苦しみを訪れることもあります。身近な人にそのような苦しみを訪れることがあります。そのような時に、私たちに求められていることは、「祈り」であり、「信仰」です。

イエス様は今、天に昇られました。それゆえ、私たちが直接イエス様に求める言葉は、「祈り」となって表れます。私たちが苦しみを覚える時は、天におられるイエス様に向かって祈らなければなりません。また私たち自身ではなく、身近な人が苦しみを覚える時も、天におられるイエス様に向かって祈らなければなりません。

その「祈り」の中で、私たちに求められていることは「信仰」です。信じて祈ることです。イエス様は私たちの「信仰」を見ておられます。イエス様なら、「どんなことでもできる」と信じる「信仰」を見ておられます。私たちは、「おできになるなら、私たちにあわれんでお助けください」という祈りではなく、「信じます。不信仰な私をお助けください」と言う祈りをささげなければなりません。

私たちは、自分のために祈る時、誰かのために祈る時、「信仰」をもって祈らなければなりません。イエス様はこう言われました。「**神を信じなさい。まことに、あなたがたに言います。この山に向かって、『立ち上がって、海に入れ』と言い、心の中で疑わずに、自分の言ったとおりになる**と信じる者には、**そのとおりになります。ですから、あなたがたに言います。あなたがたが祈り求めるものは何でも、すでに得たと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります」**(マルコ 11:22-24)。

私たちの祈りの言葉に、「信仰」をのせて祈っていきましょう！その時に私たちの「祈り」は、力を持つのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちの人生には、しばしば苦しみを訪れます。その時にイエス様は私たちに、「祈り」と「信仰」を求めておられます。私たちは確かに不信仰ではありますが、あなたには「どんなことでもできる」と信じて祈らせてください。「おできになるなら」と祈るのではなく、「信じます。不信仰な私をお助けください」と祈らせてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。